
タイトル	建築家太田実の建築表現にみる水平性について
著者	須田, 邦昭; SUDA, Kuniaki
引用	北海学園大学工学部研究報告(39): 45-61
発行日	2012-02-14

建築家太田実の建築表現にみる水平性について

須田 邦 昭*

On the Horizontality of Architectural Form of Minoru Ohta, Architect

Kuniaki SUDA*

要 旨

太田実は、都市計画研究者であると同時に、北海道におけるプロフェッサー・アーキテクトの先駆けの1人といえる（北海道大学に1948年から1986年まで在職。2004年没、81歳）。

本研究のテーマは北海道の自然風景に対する建築表現の可能性の検討にある。これまでの北海道におけるシンボリックな自然風景のひとつに、大平原のイメージをあげることができる。この大平原的な自然風景に対し順応的に調和する建築表現に「水平性を基調とした建築」があげられるが、あまりに常識的な定型である。しかし設計要件に困難さが伴う公共的な施設でかつ比較的規模を感じさせる建築となると実現した例は必ずしも多くはないであろう。

本稿では上述のテーマの一環として、太田の作品のうち「水平性を基調とした建築」を対象にして、自然風景と建築表現の関係性、すなわち建築景観としての特質について解釈を試みている。

ここではその好例といえる「北海道大学クラーク記念会館（以下、クラーク会館）」と「国立北見工業短期大学（以下、北見工業短大）」をとりあげた。さらにこれと関連して「北海学園大学図書館」と、実現されなかった作品「北海道立美術館プロジェクト」にもあたっている。

1. はじめに

本稿が対象とする太田実は、北海道大学工学部建築工学科の教官として都市計画を中心とした教育研究を行う一方で建築設計活動を行っており、北海道におけるプロフェッサー・アーキ

* 北海学園大学工学部建築学科

* Department of Architecture and Building Engineering, Faculty of Engineering, Hokkai-Gakuen University

テクトの先駆けの1人といえる。

北海道の建築家にとって、雪と寒さ、広大な自然など、絶えず圧倒的に強い力で建築に介入してくる北海道の自然風土に対し、どのような表現言語を創造し地域的表現性を得るかは、常に大きなテーマであるといつてよい。この点、太田は北海道における建築の地域的表現性をめぐる幾つかの論考をあらわすなど¹⁾、強い問題意識を持っており、自身の建築作品はその実践でもあったであろう。

太田の初期作品について、当時、建築評論家浜口隆一が「北海道の文化の地域的特性は自然というファクターが強く浮かび上がっていることにある。(中略)北海道の人たちはここ数十年にわたって努力し、今日の北海道の建築やデザインは、ある主体性のようなものを確立しかけているように私は思う。こういう動きの中で目立つ業績をあげてきた1人が、太田実氏である。」²⁾と位置付けている。また北大退官(1986年3月)を記念し、同講座の卒業生が中心となって刊行した「太田実建築作品集」³⁾の巻頭に寄稿した建築家丹下健三は「北海道の風土をより深くとらえ、それを建築のデザインとして表現しておられる」と述べ、また同じく寄稿した建築家芦原義信は、「登別温泉科学館や北大クラーク会館に示された北海道の地域性と近代建築の進路をうまく結びつけた手法をみるにつけ、またその後の筋の通った一貫性を知るに至り、本当に素晴らしいことであると考えている」と、当初の作品のみならず太田の作品全般に対して、北海道らしさを表現したものと評価している。

北大における設計活動は研究活動と並行しているため作品数は多くはない(北大在職は1948年～1986年、2004年没、81歳)。それらは研究室として設計されたものと設計事務所と組んで設計されたものとなる。このうち北海道内に建てられた公共的な作品は9つあるが、いずれも比較的規模を感じさせるものである(本稿のテーマの関係上、自邸と大規模組織編成により設計されたオリンピック関連作品は除いた)。

これまでの北海道におけるシンボリックな自然風景のひとつに、大平原のイメージがある。現実においては時の経過とともにこのイメージにかなう自然は少なくなっているのだが、本稿で取りあげる太田の設計活動の前期にあたる1960年代あたりは、当然そのようなイメージを感じさせる地域が散見されたであろう。

この視界を遮るもののない大平原的な自然風景に対し順応的に調和する建築表現の定型のひとつとして「低く水平に延びる建築」をあげることができる。これに少し幅を持たせて「水平性を基調とした建築」と言い換える。

本稿では、太田の上記作品から「水平性を基調とした建築」を対象にして北海道の自然風景と建築表現の関係性について考察する。いわば建築景観としての特質についての解釈である。

2. 水平性を基調とした建築による景観的効果について（プレーリー住宅を通じて）

（1）建築景観としての意義

「水平性を基調とした建築」は、大平原的な自然風景においてどのような景観的意義をもつだろうか。その具体的かつ典型的な例といえば、いうまでもなくフランク・ロイド・ライトのプレーリー住宅である。ライトが注意をはらった点を通じその建築景観的な意義を再確認する。

ライトはアメリカの草原地帯の単純化した自然風景に対して、「この偉大な単純性、私はそれゆえ本能的にシカゴ帯の大平原を愛した。木とか花とか空の大自然のコントラストは私の血をおどらせた。そして大平原においてはわずかな高さがより高いものに見え、その逆に幅は実際よりも狭く感じられた。(自叙伝)」⁴⁾といている（以下、下線は筆者による）。

ライトが愛した大草原の単純さは、この北海道の大平原にも認められる。特に冬季には、多くの草木が落葉することから視界の展望性が増す。加えて、そこに圧倒的な雪が覆うことによって個々の細部が消去されて連続していくようで、一段と風景の単純化が高まるといえるであろう。

ライト研究者・谷川正巳は、プレーリー住宅について、広大な自然に融合、あるいは共存し得る住宅をめざし、「自然環境を破壊しないどころか、むしろ作品が自然の一部となることを願い、更にはその作品によって、自然景観が一層精彩を増す結果となった。」⁵⁾と評価している。

これを再確認するなら、視界を遮るものが少ない風景のなかに建つ「水平性を基調とした建築」には、「作品が自然の一部となる」つまり自然との一体化を印象づける可能性と、「自然景観が一層精彩を増す」つまり周辺の景観を引き立てる可能性とが同時に期待されるのであり、これこそが順応的な建築景観の真髄であろう。

（2）水平性の形態要件

プレーリー住宅の傑作と評されるロビー邸について、たとえば前述の谷川は次のように評価する。「穏やかなこう配屋根、極端に突き出た軒先、横目地の強調された煉瓦の外壁、縦長の連続窓さえが水平線を強調する。（中略）中西部の草原地帯にあって、高さという高さは、すべて否定されなければならない、としたライトのモットーが、最もよく理解出来る住宅である。大地を這うように、一直線に伸びたこの住宅を大気が吹き抜けて、正に自然と一体になった証を見る思いがする。」⁶⁾

谷川の評価を踏まえてロビー邸から学ぶこととして、水平的な建築表現の基本のひとつに、

「穏やかなこう配屋根，極端に突き出た軒先」つまりは「勾配の少ない屋根やフラットな屋根のラインがそのまま深い庇となって伸びる」ことがあげられるが，非住宅建築では片持ち梁などでフラットな上部を張り出して水平性を強調した構成もこれに準じた表現効果があるであろう。今ひとつは「大地を這うように一直線状に伸びる」ことだが，これは立面のプロポーションが相対的に水平性と直線性を強く感じさせる構成であることと，それが周辺の風景との関係でどのような遠景を形成するかによるであろう。その際，谷川が「縦長の連続窓さえが水平線を強調する」と評しているように，建築に部分的に配された適度な垂直線には，水平性の全体を対比的に強調するような効果が期待される。

3. 建築のスカイラインによる作品分類

太田の作品から「水平性を基調とした建築」を選び出すと，それ以外の作品はスカイラインの点では傾斜屋根や段屋根あるいはアーチ等々でほぼ特徴づけられる。ここではこれらの作品を仮に「傾斜屋根型構成を基調とした建築」と呼ぶことにする（表参照）。ちなみにこれら後者の作品は，そのほとんどが設計要旨を通じて周辺の自然環境，またはそのイメージと関連させた建築表現であることがうかがえる。ただし表中，その他の欄の1作品は，写真からは一見水平性を基調にしたようにみえるが，全体が二つの正方形平面の組み合わせで成り立っているため，便宜上その他に分類した。

「水平性を基調とした建築」のうち，設計要旨において自然風景に対する順応的な建築景観の意図が明示されている作品は「クラーク会館」と「北見工業短大」である。両作品とも国内外の専門誌に取り上げられ一定の評価を得ている。「クラーク会館」は当時，全国版の週刊誌の表紙を飾っている⁷⁾。

関連して「北海学園大学図書館」と「北海道立美術館プロジェクト（1964年）」もとりあげる。「北海学園大学図書館」については，一見，水平性が感じられないが，構成理論上において喚起される，いわば解釈としての水平性をとりあげる。「北海道立美術館プロジェクト」は，実現されなかったものの，水平性が十分認められる作品である。

4. 自然風景への対応意図から水平性を基調とした作品

4.1. 「クラーク会館」の水平性について

（1）形態の概要（図1参照）

学生会館を基本に，大学のコミュニティセンターの機能をそなえている。具体的には談話ロビー，展示ギャラリー，オーディトリウムと関連諸室，集会室，食堂，喫茶室，書籍等の売店，宿泊室等々，多岐にわたる。

これらの機能を敷地の傾斜を利用して，正面入り口側からは地上2階地下1階に，反対の南

表 スカイラインのタイプによる作品分類

水平性を基調とした作品	
	北海道大学クラーク記念会館 (1957)
	国立北見工業短期大学 (1961) *
	北海学園大学図書館 (1969)
傾斜屋根型構成を基調とした作品	
	登別温泉科学館 (1957) *
	北海道大学百年記念館 (1978)
	北海学園大学体育館 (1969)
	士別市立博物館 (1981)
	北海道立近代美術館 (1977)
	帯広百年記念館 (1982)
その他	苫小牧博物館・埋蔵文化財調査センター (1985)

*日本建築学会北海道支部編「北海道の建築 1863-1974」, 丸善書店, 1975より転載。
 その他は太田実先生退官記念事業会編「太田実建築作品集」, 新建築社, 1989より転載。

側からは地上3階となる断面構成をとり、およそ短辺が30m、長辺が80mの長軸でコンパクトな箱状形態におさめている。建物頭部は軒庇を張り出したルーフによって水平性の強いスカイラインをかたちづくっている。

(2) 水平性への意図

太田は設計要旨のなかで、水平性について次のように述べている。「風土への努力」として「軒先を大きく張り出したのも、外壁のウェザリング上の保護と同時に水平線を強調するためであった。北海道の広大な土地とくに北大のひろいキャンパスの自然環境には水平線強調の建築の方が適応するように思われたからである。」⁸⁾と、水平線を強調する意図が「北大のひろいキャンパスの自然環境」に「北海道の広大な土地」のイメージを重ねた建築景観の表現にあったことを明確に述べている。

建築の平面プロポーションを細長状にしたことに加え、「軒先を大きく張り出す」ことで大きな表現効果を意図したことはいうまでもないが、それが北海道の雨・風雪からの保護機能を兼ねており、単なる表現のための表現ではないと、その合理性を説明している。

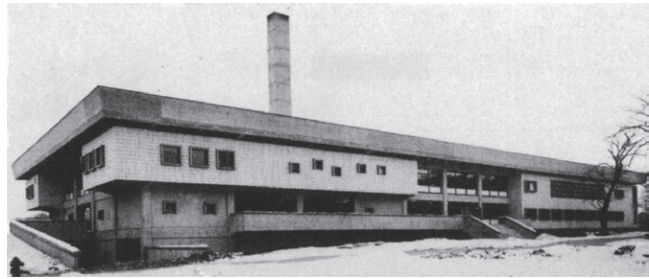
(3) 屋根形態とスカイラインの関係

当時、建築家菊竹清訓が、比較的造形に立ち入って論評しているので、これを手掛かりにこの建築の水平性をもつ特質を読み取ってみる。

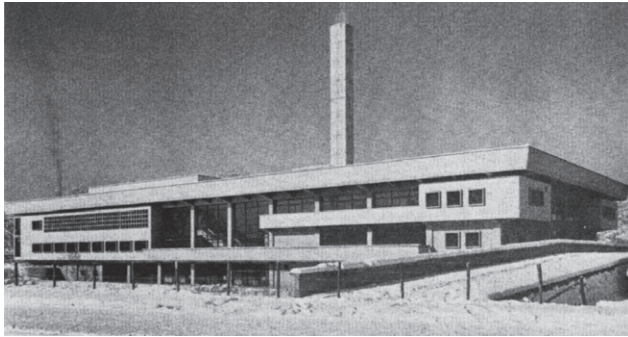
菊竹は「(前略)このクラーク会館の印象は、いかにも素朴で、すっきりしたものに見えた。全体の簡潔なこの表現は、一つには屋根に目障りな突起がまったくなく、キッパリとしたスカイラインにその原因があるように思われる。一つ屋根の下に学生会館としての多岐な機能を抱きこむ大屋根の解決は、良く共感しうる優れた解決とってよいであろう。」⁹⁾として、まず「いかにも素朴で、すっきりしたものに見えた」とその印象を語り、続けてこれを「全体の簡潔な表現」と言い換え、その要因として「キッパリとしたスカイライン」をあげている。

「キッパリとしたスカイライン」を可能にした「屋根に目障りな突起物がまったくない」に関しては、厳密にいうなら、オーデトリウムを設けているため屋上には突起物がある。一般的に観客席の床勾配やフライズなどの関係で屋上に突起をもつ例は少なくないが、この建築では敷地の傾斜を利用して、正面入り口側からは地上2階地下1階構成に、反対の南側からは地上3階構成となる断面計画によって屋上の突出を控え目な高さに抑え込むことができているのである。

菊竹は次に「一つ屋根の下に学生会館としての多岐な機能を抱きこむ大屋根の解決は、良く共感しうる優れた解決とってよいであろう。(中略) ドラマチックな大屋根の実現は、この建物の機能を押しえたというよりは、むしろはるかによく示すことになったとってよいであろ



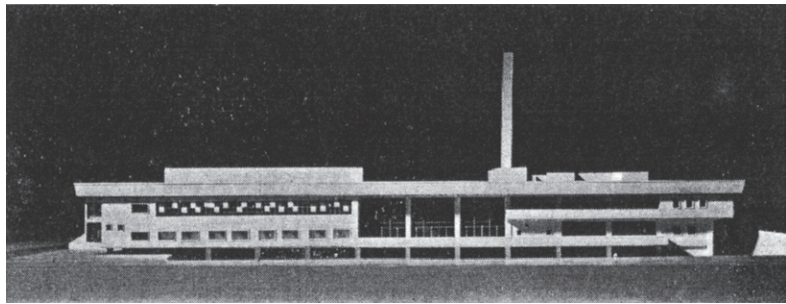
北側外観*1



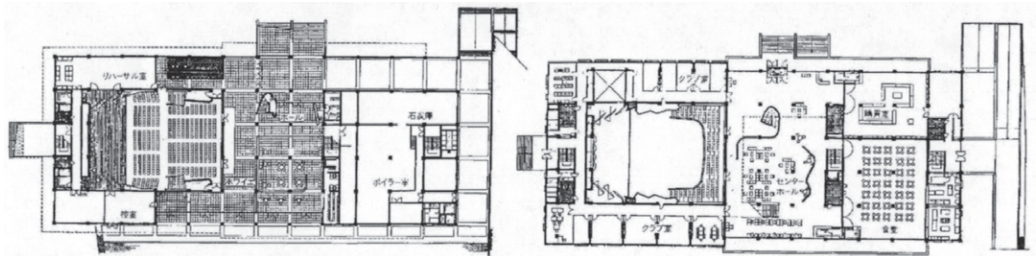
南側外観*2



南側外観・右端部*3



計画案模型（南側）*4



平面図*5 左：地下1階 右：1階

図1 北海道大学クラーク記念会館

*1*3*5 太田実先生退官記念事業会編「太田実建築作品集」, 新建築社, 1989より転載.

*2 日本建築学会北海道支部編「北海道の建築 1863-1974」, 丸善書店, 1975より転載.

*4 彰国社「建築文化」, Vol. 13, No. 3, 1958より転載.

う。屋根の無言に対して、壁は能弁である。バルコンと大出窓によって、壁面は内部の機能を表現しながら変化にとんだ魅力をつくりあげているからである。」と深い考察を加えている。

確かにこの水平性の要因は、多岐な内部機能を個々の外壁形態やバルコニーに表現させ、軒先を大きく張り出させた簡潔な形態の大屋根によってそれらを統合するような形態構成にあるのだが、これを少し補足するなら、その水平性が際立っているのには、屋根と外壁面との境を造形的に切り離したような立面表層の組立て方も関係しているのではないだろうか。このことによって屋根から分節解放された外壁やバルコニーは片持ち梁を駆使して部分的に自由な水平形態をかたちづくっている。この立面表層の特徴こそが菊竹のいう「全体の簡潔な表現」と「壁は能弁である」こととを両立させていると感ぜられる。これが「ドラマチックな大屋根」と称した理由であろう。

(4) パラペットの形態と軽快感

パラペットの形態について設計要旨ではふれられていないが、その角度については、様々に検討されたのではないだろうか。角度とは、パラペットがやや斜め上方に開く形になっており、パラペット立面の全体が超扁平の逆台形になっている点である。これによって水平性にある種の軽快感と緊張感が付与されたと感じる。このことは案外に重要である。もしパラペットの立面が単純な扁平の長方形であったなら、今とは違って静的な安定感が強まり、鈍重な印象すら与えたかもしれないと思うからである。

さらにこの軽快感は、片持ち梁で相当な長さに張り出された外壁やバルコニーによって強化されているといえる。

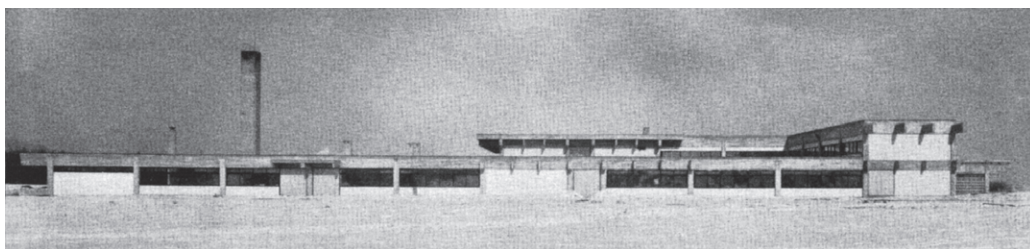
このようにして「クラーク会館」の水平性は、北海道の大地をかすめながら、その大空に向けて軽快にスカイラインを描く簡潔な建築景観を示したといえるのではないだろうか。

4.2 「北見工業短大」の水平性について

(1) 形態の概要 (図2参照)

この短大は現北見工業大学の前身にあたる。平面の基本は2つの中庭を囲み各辺が凸部をもつ構成であり単一矩形にはおさまっていない。その後の増築や将来的に4年制への移行を想定したためであり、設計要旨ではこの平面の基本をマンジ形と称している。

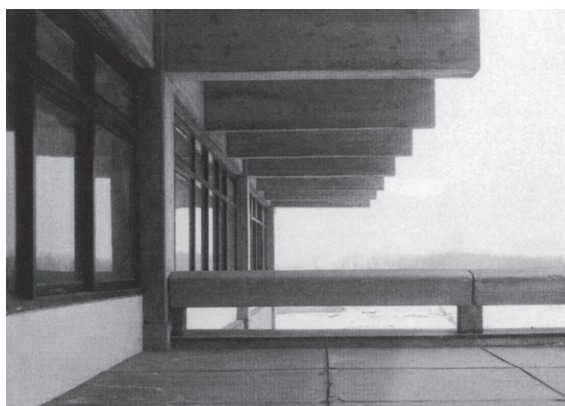
1階をメインに一部2階をもつ構成である。学校建築に特有の横に長い立面が複数方向に展開するが、とりわけ東西面では100mにもなる。増築に備えて持ち出された梁の露出表現も特徴的である。



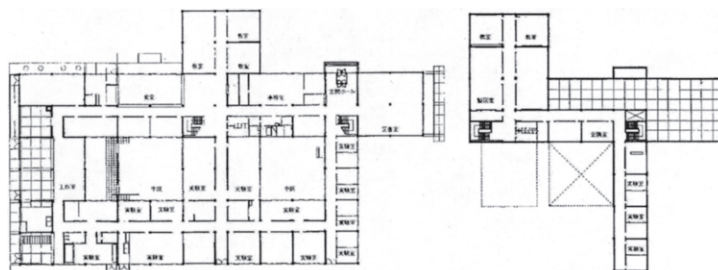
*1



*2



*3



平面図*4

左：1階
右：2階

図2 国立北見工業短期大学

*1 日本建築学会北海道支部編「北海道の建築 1863-1974」, 丸善書店, 1975より転載.

*2 *3 *4 太田実先生退官記念事業会編「太田実建築作品集」, 新建築社, 1989より転載.

(2) 水平性への意図

太田はこの建築の水平性について設計要旨に以下のように述べている。まず「この大学は、阿寒連峰を南方にみはるかす広大な北見の丘陵地に建てられている。四方遙かに、眼をさえぎるものもないこの雄大な自然環境は、新しい学園の誕生にとって恰好の場所となった。建物もそれに調和させて、水平線を強調し、東西面からみると約100mの長さで敷地内にのびのびと広がっている。(中略) 将来は4年制の工科大学になる予定も考えられている。したがって、プランとしては、このような将来の拡張計画に即応させることが、その主要な眼目となった。」¹⁰⁾

このことから水平性の強調が、道東の自然景観との順応的な調和を意図したものであることは明らかである。校舎は東西面で100mの長さを占めているが、「クラーク会館」のような単一の矩形ではなくマンジ形を基本に各棟が1階または2階構成で水平に伸びる。そのため相互に重なったり、ずれたりして見える遠景は動的な印象を与える。

(3) 梁の表現性

それに加えてこの建築の水平性を独特なものにしているのが梁の表現性である。評論家浜口は、この点について「大地にぴったりと根をのばしたようなかっこうの建物で、水平に走る桁行方向の太い梁が印象的である。ここには北海道の建築らしい逞しさが感じられる。」¹¹⁾と、この建築景観に地域性を感じている。

設計要旨の中で太田は、「予算面の制約もあり、構造体を空間的に整理して、端正な秩序観をつくりだすことで精一杯だった」と述べているが、そのことがかえって「クラーク会館」とは異質の水平性を獲得する契機になったように思われる。

浜口の評価を手掛かりに、梁の表現性について考察する。浜口が印象的という「水平に走る桁行方向の太い梁」について具体的にみるなら、外壁面の頭部にコンクリート打放しの梁を露出させ、それがそのまま外部に持ち出され、これと平行に他の梁も等間隔に持ち出された表現は、一群となって庇のようなイメージを与える。その太い梁の切り口には重量感と力動感がある。

建築全体については「大地にぴったりと根をのばしたようなかっこう」と受け止めているが、そのような効果のひとつに、梁の上端に載るルーフの見付けの厚さをかなり小さく抑えることで、あたかも梁の上端ラインがそのまま直線的かつ水平的に低いスカイラインを描くかのように表現されている点があるだろう。梁端部の持ち出し部分の表現も注目される。すなわちそれら梁端部が一群となり、将来の増築へと水平に伸びようとする触手のようなイメージを喚起する。その結果、もともとの動的な水平性にさらに強い動きが与えられた感がある。

このような形態処理から、一群の梁によって頭部を強く抑えられた建築は、あたかも荒野の地平、あるいは風雪の地平を這うような景観イメージを醸成することになる。浜口が感じた

「北海道の建築らしい逞しさ」とは、このような建築景観を指しているのであろう。

4.3. まとめ

「クラーク会館」と「北見工業短大」は、個別の地方性や建築条件を解釈することで、同じ水平性というテーマに対してそれぞれに異質の建築景観を示したといえる。

ここで煙突について触れておく必要があるだろう。両建築とも、その水平なスカイラインを破るように唯一の垂直線である煙突がそびえている。建築表現において煙突は必要悪的な要素になりやすいが、両建築の垂直線は、かえって建築の水平性を対比的に際立たせる役割を果たしているように思われる。とりわけ「北見工業短大」においてその印象が強い。そのプロポーションは大いに練り上げられたものと推察される。

5. 水平性を感じさせるその他の作品

前章では、表に示した「水平性を基調とした作品」のうち、設計要旨において自然風景に対する順応的な建築景観の意図が明示されている2作品をとりあげたが、本章では、それとは別種の水平性が認められる1作品と、1プロジェクトをとりあげる。

5.1. 「北海学園大学図書館」について

(1) 形態の概要 (図3参照)

平面は東西方向に主軸を展開する構成である。この主軸ゾーンに閲覧室・書庫・ホールなどを配置し、軸の側面に2階を主にして関連スペースを付属させている。特にこの2階レベルで付属スペースのユニットを片持ち梁で持ち出す構成が特徴的である。

設計要旨によると、閲覧空間も書庫も、ともにユニットによる分節を構成の基本とし、軸の両端を延長すれば将来、1~2単位の増設を全体の構成を妨げることなく行うことが可能な平面システムを維持している。この点について「成長と増殖の概念」であり、「建築物も有機的な生物体のように構造の主軸となる背骨に必要な神経中枢（設備系）を収めながら成長していくのが望ましい」という考えから、構造の系と設備の系の一体化を図り、ダブルビームとダブルコラムを軸として採用し、その中に暖房用ダクトのサプライとリターンを内包させた。」¹²⁾と述べている。

この考え方は、あたかもメインストラクチャ（主軸ゾーン）となるスペースの成長に連動してエレメントスペース（付属スペース）が増殖する有機体のシステムを連想させ、当時席卷したメタボリズムの空間構成理論と同種である。

(2) 解釈としての水平性

設計要旨では、建築表現の水平性について言及していない。しかし次のとおり水平性を論じる余地はあるであろう。すなわち、この建築の水平性については、ふたつの点から取り上げることができる。ひとつに構成理論上喚起される、いわば見えない水平性であり、いまひとつは隣接の体育館との関係における水平性である。

①構成理論上の水平性について

この建築から具体的な水平性を視認することはできない。仮に設計要旨にあるように主軸ゾーンを1～2単位分増設した姿であれば多少の水平感を覚えるかもしれないが、実現されなかった。

先の「北見工業短大」の水平性も増築の可能性において発想されているが、それを自然風景と建築景観の関係性というテーマに昇華させたのに対し、この建築の場合は、空間の組立てシステムとその拡張性そのものを表現テーマ（増築の秩序の視覚化）にしている。

そのためか実際上の水平性には乏しいが、増築システムという構成理論に立つことで水平的に拡張する方向性を脳裏に描くことはできる。

しかもそれを暗示させるようなディテール表現がパラペット部分に施されている。水平拡張性を表現するために梁上のパラペットを低く抑えている点は「北見工業短大」同様だが、さらに主軸ゾーンの長辺方向に限ってそのパラペットの先端形態に工夫をほどこしているのである。つまり、片持ち梁に添わせてパラペットを突き出し、その先端を、通常なら垂直にする所、上辺を下辺よりやや長くして斜め上方向のラインをつくって止めているのである。これが主軸ゾーンの拡張方向を指し示す矢印のようにもみえる。これによってやや水平への動性は感じとれるのだが、表現言語がくどいというか、装飾的でありキッチュというほかないであろう（**図3**のうち、立面図と写真に付した破線の円囲いの箇所）。

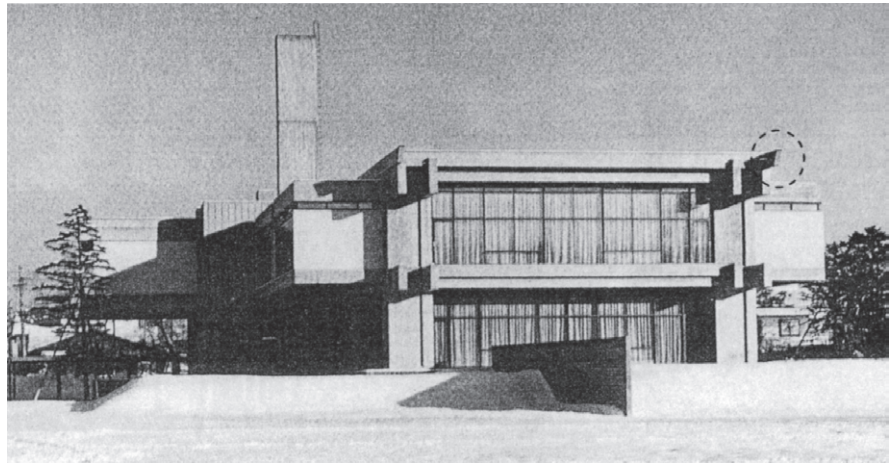
一方、2階の片持ち梁による付属スペースは、理論上は主軸ゾーンの拡張に応じて付加できるし、その持ち出しも様々な長さが可能である。そのような建築表現は、メインストラクチャである主軸ゾーンの拡張と2階エレメントスペースの空中拡張という二つの拡張性によって浮遊・軽快感と緊張感を想像させるであろう。

このように「北海学園大学図書館」には、構成理論にたつことで解釈される、いわば見えない暗示的な水平性をうかがうことができるだろう。

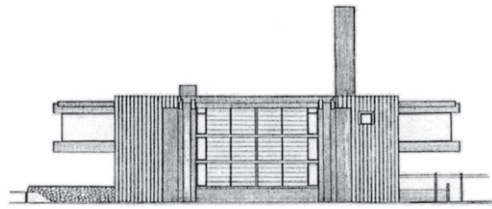
②隣接の体育館との関係における水平性について

本稿では体育館は「傾斜屋根型構成を基調とした作品」に分類される。図書館と体育館は同時に設計され、20mほど離れた二つの建築を渡り廊下でつなぐという構成である（**図4**参照）。

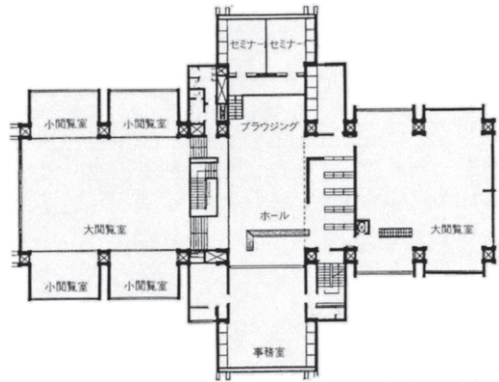
両者を対としてとらえるなら、相互に引き立て合う対比的構成が見て取れる。屋根を分節し高さを段状に変える動的な構成は、図書館のメタボリズム的構成に合わせたものであろう。体



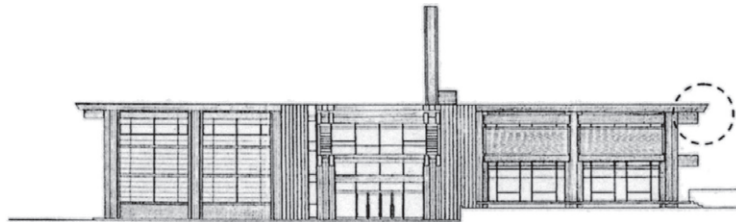
西側外観*1



東側立面図*2



2階平面図*3



東側立面図*4

図3 北海学園大学図書館

*1~*3 「建築文化」, Vol. 24, No. 3, 1969より転載.

*3*4 太田実先生退官記念事業会編「太田実建築作品集」, 新建築社, 1989より転載.

破線の○囲いは筆者による(写真, 立面図各一ヶ所).

育館が縦方向のスリットによる分節形態を構成しているため、図書館の形態の印象は相対的に水平的となる。

図書館同様、設計要旨には風景との関係についての言及はないが、この体育館の形態は、容

易にトタン屋根や腰折れ屋根といった北海道の民家や農村の原点的な建物風景を連想させる。

この点を踏まえるなら、図書館は、北海道らしい建物風景を引き立てる水平性を感じさせるといえないだろうか。ただし、体育館の形態と関係づけてこそ生じる「感じ」であるから、水平性というよりは水平感といったほうがよいかもしれない。



図4 北海学園大学図書館
同体育館の遠景

「建築文化」, Vol.24, No. 3,
1969より転載。

5.2. 「北海道立美術館プロジェクト」について

以上の実作とは別に太田にはもうひとつ「水平性を基調とした作品」がある。それは「北海道立美術館プロジェクト（1964年）」である。実作の「北海道立近代美術館（1977年）」は、前述の「傾斜屋根型構成を基調とした作品」に分類されるが、このプロジェクトは当初現美術館設立の運動母体であった北海道美術館建設期成会の調査検討グループの一員として提案した空間構成の基本構想である¹³⁾。このプロジェクトは、現美術館の実現まで長期の過程を要した事情から実現に至らず、いわば「幻の北海道立近代美術館」ということができる。

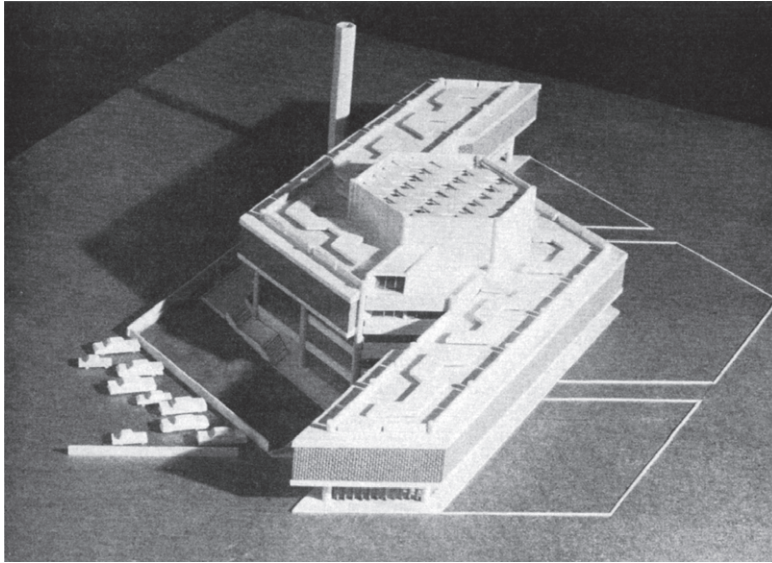
（1）形態の概要（図5参照）

具体的な敷地や規模、内容などの点で現美術館とどのような相違があるのか不明である。メモ程度の短文の設計要旨のなかで「このプランは中央の六角形ホールを基本としてギャラリーを旋回成長させながら、上下・左右に伸展させる構想から生まれたものである。中央のホール回りに設けられた斜路によって床高の違う幾つかの展示スペースを相互につなぎ、展示内容の違いに必ずると同時に、全館の巡回式の鑑賞も可能になるようになっている。」¹⁴⁾と述べている。

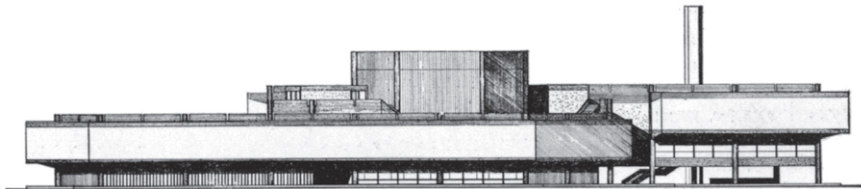
この骨格は外観にも明快に展開されており、動的な建築表現をもたらしている。

（2）旋回成長の表現としての水平性

この作品は十分に水平的な表現で占められているが、短文の設計要旨には地域風景との関係性についての言及はなく、ギャラリーの旋回成長の、つまりは拡張のシステムを表現の基調に



模 型



立面図

図5 北海道立美術館プロジェクト

浜口隆一「北海道の建築」，デザイン，美術出版社，1965より転載。

した作品となっている。その点では前章の「北海学園大学図書館」と似通っているが、図書館の場合、その水平性は明快に表現されているのではなくその構成理論上において想起されるものであったのに対し、このプロジェクトの水平性は、明快かつ直截的に表現されており圧倒的な印象を与える。

立面図や模型をみると、片持ち梁で持ち出されたギャラリーが1階から3階へと床高をスキップさせて上昇し、中央のホールから遠心的に離れていくような水平性があるが、これと柱型を見せる1階や部分的に配されたピロティーとが相まって水平性が一段と強調されるものとなっている。この構成は、部分的にはコルビュジェの成長する美術館を彷彿させるが、六角形平面に基づいて形づくられる立面は4角形平面のそれとは異なり、より変化を帯びた印象を与えるし、そこに床をスキップさせながら拡張する構成が加わることで、この建築の水平性は軽快感を帯び、より動的といえる。

建築評論家浜口が「まだ実現していないけれども、注目されるものに北海道立美術館プロジ

エクトがある。これは正三角形の組合せによって構成されているプランで、いま、そのために建設資金が集められつつあるが、実際に建てば、彼の傑作の一つになるものであろう。」¹⁵⁾と、「傑作になる」可能性を強調しているのも当を得ていたかもしれない。

ところで上述のように、設計趣旨を短文にとどめたためか地域的表現に関する言及はない。しかし、六角形格子による空間造形からは雪の結晶が連想されるし、とりわけこのギャラリー空間ののびやかさは、北海道の大平原のイメージに似つかわしい建築景観をつくり出したかもしれないと想像するのである。

6. おわりに

北海道における大平原的な風景やそのイメージに対して、水平性を基調とした建築表現はひとつの定型である。しかし設計要件に困難さが伴う公共的な施設でかつ比較的規模を感じさせる建築となると実現した例は必ずしも多くはないであろう。

太田の「クラーク会館」と「北見工業短大」はそのような条件において、水平性を基調とした建築表現の典型を実現し、自然風景に対しどのような建築景観が可能であるのかを具体的に示したといえる。また同じ水平性の表現といっても、立地する風土の差異に応答してそれぞれ質的特性の異なる建築景観を実現している。

本稿で取り上げたそのほかの2作品（実作1点とプロジェクト）は、システムの視覚化という、自然風景とは異なったアプローチから水平性を表現したものであり、建築景観上の意図があったか否かを確認できないが、結果的には北海道の自然風土ないしはそのイメージに対して十分に順応性を示しているといえないだろうか。本稿の冒頭でふれたように、太田は建築表現の地域性に関する幾つかの論考をまとめていることから、その問題意識がこれら2作品の水平性にも投影されているとみるのも、必ずしも誤った認識ではないであろう。

北海道の建築家は、建築景観の地域性というテーマにどのような立ち位置をとるべきかが常に問われるのだが、太田が北海道の現代建築の前期に、そのタイポロジーとしてオーソドックスな順応的な建築景観を、特に公共性の高い建築において表現してみせた意義は小さくないであろう。

参考文献

- 1) 須田邦昭：建築の地域的表現性に関する建築家としての太田実の言説について、北海学園大学工学部研究報告、No.38, pp.37-52, 2011.
- 2) 浜口隆一：北海道の建築—太田実の作品を中心に—、デザイン、美術出版社、pp.27-40, 1965.
- 3) 太田実先生退官記念事業会実行委員会編：太田 実 建築作品集、新建築社、1989. 事業会協賛者に限定頒布された。
- 4) 浦辺鎮太郎・天野太郎：フランク・ロイド・ライト1（現代建築家シリーズ）、美術出版社、年譜

- p.12, 1967.
- 4) 生田勉・三沢浩：フランク・ロイド・ライト2（現代建築家シリーズ），美術出版社，p. 6，1968.
 - 5) 増田彰久・谷川正巳：フランク・ロイド・ライトの世界，技法堂出版，p.185，1976.
 - 6) 同前，p.189，1976.
 - 7) クラーク会館についてはUdo Kultermann：“Neues Bauen in Japan”，Wasmuth, Tübingen, pp.42-43, 1960. Piero Moroli：“Architectura Contemporanea”，Edindustria Editorial, pp.45-42, 1962. 週刊朝日，1965年12月25日号。
北見工業短大については“Baunen und Wohnen”，Zürich, Aug. 1962. Karl Otto：“Schulbau 2”，Stuttgart, pp.278-283, 1965.
 - 8) 太田実：この建築の設計にあたって，建築文化，彰国社，Vol.15, No. 2，p.26, 1960.
 - 9) 前掲“太田 実 建築作品集”，p.35.
 - 10) 前掲“太田 実 建築作品集”，p.40.
 - 11) 前掲“北海道の建築—太田実の作品を中心に—”，p.40.
 - 12) 太田実：北海学園大学図書館・体育館—空間の分節と一体的成長，建築文化，彰国社，Vol.24, No. 3，p.78, 1969.
 - 13) 太田実：北海道立近代美術館の建築，建築文化，Vol.32, No.371, p.30, 1977.
 - 14) 前掲“北海道の建築—太田実の作品を中心に—”，p.39. 当該プロジェクトについて短文だが太田の設計趣旨が添付されている。
 - 15) 前掲“北海道の建築—太田実の作品を中心に—”，p.40.